

研究論文

言語的相互行為におけるアイデンティティとは：
Subjectivity と Identity による一考察

What is identity in linguistic interactions:
An examination by subjectivity and identity

ミラー成三(千葉大学, 人文社会科学部)

Seizo MILLER (Chiba University,

Graduate School of Humanities and Social Sciences)

Abstract

After the definition by Erickson, studies on identity have been applied in many areas and developed. Recently various studies have adopted conversational analysis for their method, for example to analyze how categories are constructed through interactions. However, there are still few studies that focus on "what is identity" in interactions. In this study, the concept Identity will be separated to subjectivity, how we express ourselves by language at each moment, and identity, the repeatedly constructed self. And by using conversational analysis as a method, I focused on, analyzed and examined "what is identity" in linguistics interactions.

I will show the definition of subjectivities that are directly or indirectly indicated, and the characteristics of indirectly indicated subjectivities. I will also show that we use identity as a resource to indicate subjectivities, and why there is a gap between subjectivities indicated by yourself and from others.

はじめに

Ericson(1950)によってアイデンティティが定義されて以降, アイデンティティ研究は現在様々な分野に応用され, 発展してきている. 特に近年では第2言語習得などの分野においてもアイデンティティを, 相互行為を通して示される可変的で流動的なものとして捉え, 会話分析(Sacks1995等, 以下CA)的なアプローチによって分析することが試みられるようになってきている(Kasper 2004, 池田 2007a, b など).

西阪(1997)は Sacks(1972)が述べる相互行為における適切さ(relevance)に注目し, 会話の中でどのようにカテゴリー(MCA, Sacks1995)が適用されているかを分析している. 西阪によると, 「日本人」や「外国人」というようなカテゴリーは常に維持されるわけではなく, 相互行為の具体的展開における様々な偶然的条件に依存しながら, 相互行為的に達成されているという. 西阪のこの指摘以降, 相互行為を通してカテゴリーがどのように構築されているのかが分析されるようになってきた(徳井 2015, Bushnell 2015 等).

しかし, そもそも相互行為を通して示されるアイデンティティとはどのようなものなのかに

ついでの研究はいまだに少ない。そこで本稿では CA 的方法によって分析される、相互行為を通して示されるアイデンティティとはどのようなものなのかを分析、考察、整理していきたいと思う。

1. 分析の枠組み：Subjectivity と Identity

本稿では会話分析的アプローチを用いて、特に相互行為における適切さの観点から相互行為を通して示されるアイデンティティを分析していく。すなわち、どのようにアイデンティティが示され、なぜそのアイデンティティが示されたのかに焦点を当て、分析していきたいと思う。本節では分析を行う前に、分析をすすめていく上で特に重要な概念である Subjectivity と Identity について述べる。

アイデンティティは応用言語学の分野において、これまで‘self’、‘role’、‘subject position’、‘subjectivity’など、様々な概念と関係して研究されてきたものの、それらの概念がどのように使われているのかについては明確にされていない(Luk 2008)。Lukによると、“最も基本的な形として、アイデンティティとは私たちの自己に関する感覚、もしくは私たちが誰なのか”を指し、“基本的に‘自己(self)’は個々の感覚と関連づけられ、‘役割(role)’はアイデンティティの静的で形式的、儀礼的な側面に焦点が当てられている。一方、主体的ポジション(subject positions)/主観性(subjectivity)は、主体性(agency)、意識的な行動(conscious action)やその著者であること(authorship)に暗示される”(pp. 121-122, 引用者訳)。すなわち、アイデンティティ研究では大きく分けて Identity と Subjectivity についての研究がされていながらも、時に二つが同じ概念として扱われている、ということである。

Bynham(2011)はこの二つを区別して分析すべきであると主張し、subjectivity とはその場その場の会話で言語を通してどう自らを表現しているか (identity brought about)であり、identity は Subjectivity よりもう少し固定的なもので、自分が繰り返し構築してきた自己(identity brought along)であると述べている。これは Weedon(2004)や Hall(1996)、Block(2013)の主張と共通している部分も多い。

本稿ではこれに従い二つを区別し、言語的相互行為を通して示されるアイデンティティを Subjectivity として会話分析的手法を用いて分析していく。さらに、分析を通して Subjectivity と Identity の関係を考察していきたいと思う。

2. データ

本研究のデータは 2015 年 1 月から 10 月までに録音されたものを使用する。データは全て、調査協力者に普段会話を行う場면을録音してきてもらうように伝えて IC レコーダーを渡し、録音してもらった自然会話場面である。以下に本稿の分析で使用する三つの場面のデータの概要を記述する。

例 1 は KF1 と AR1 の知り合い同士であり、昼休憩時の会話である。例 2~4 は C が友人とビアフェスに行った時の会話であり、ここでの参加者の関係性は以下の通りである。A と B が夫婦、C と D が友人、D と E が友人である。C と E は初対面であり、また AB と CDE は初対面である。例 5 は C がビアフェスに行った時の会話で、例 2~4 のグループと別行動をしている時に録音された会話である。F は C が以前働いていた会社の上司にあたる。

なお、本稿におけるデータに登場する固有名詞は全て匿名化されている。

3. 相互行為を通して示される Subjectivity

相互行為を通して示される Subjectivity には大別して二つのものがある。すなわち、直接的に示される Subjectivity と間接的に示される Subjectivity である。直接的な Subjectivity は何かをするために明示されるものであり、何かをするとその行為の中に暗示される間接的な Subjectivity とは区別することができる。以下でいくつかの例の分析を通してこの二つを見ていきたいと思う。

3.1 直接的に示される Subjectivity

直接的に示される Subjectivity は、ある目的を達成するために相互行為を通して明示的に示される。カテゴリーを示すことも直接的に示される Subjectivity の一つのバリエーションであると言える。

例 1

- 1 KF1 会社に行く前は:(1) 毎日、ほぼほぼ寝坊してるんで:, そんな,考える暇ないです
2 AR1 寝坊してる
3 KF1 ギリギリで行くん[で:
4 AR1 [hhh, 間]にあってれば大丈夫だよ
5 KF1 合わせてます
6 AR1 今何時に sh- 会社行くの,くじとか
7 KF1 くじですね
8 AR1 起きるのは, 何時に起きてるの
9 KF1 起きるのは:, ろくじとかろくじはんとか
10 AR1 あそ↑う,早いんだ(1. 5)
11 KF1 準備するのにすごい時間がかかるんですよ
12 AR1 それ d-, それでギリギリなんだ
13 KF1 それでギリギリです hh
14 AR1 え:たいへんだね
15 KF1 → 女子ってたいへんなん,ですよ
16 AR1 そんなにかかると思わなかった(1)いや俺も六時半に起きるんだけど,でも
17 七時半くらいにでかけてるから,でかけるときはね(3)たいへんなんすね

この例は KF1 と AR1 の会話である。ここでどのような subjectivity が示されているか、またそれによってなにが行われているかを分析する前にこの例全体で何が行われているかを明らかにしておきたいと思う。

L01 では KF1 が“会社に行くときは、ほぼほぼ寝坊している”と述べることによって朝は考えている時間がないことを述べている。L02 でそれを受けた AR1 が“寝坊してる”と KF1 の発話を繰り返す形で確認を行うと、L03 では KF1 が“ギリギリで行くんで”と述べることによって寝坊

していることを修復している。L04ではAR1が笑いつつ“間にあってれば大丈夫だよ”と述べることで、先のKF1の寝坊しているという発言が寝坊しているが、間にあっているという意味で言われていたことを理解したことを示している。すると今度は、L06からAR1が寝坊しているが間に合っているというKF1の朝の状況の詳細を質問し始める。L07ではKF1が会社へ9時に行くことが、L09では6時か6時半に起きていることが明かされる。L10では“あそ↑う”と述べることによって、これらの情報が上昇イントネーションとともに理解が示される。これは直後に“早いんだね”と述べていることから分かるように、AR1にとっては意外性のある情報であったということが分かる。すなわち、9時に会社に行くのに(AR1にとっては早い)6時か6時半に起きているのにもかわからず、KF1にとってはそれが“寝坊”とも言える時間であることに對して驚きが示されているわけである。直後のL11からKF1によって自身の行動の正当化が行われる。すなわち、自身の起きている時間がギリギリで“寝坊”と言ってもよい状態であることの説明である。しかしL12からも分かるように、AR1はその説明ではに“寝坊”と表現するに足ることであると納得していない。しかしL13でKR1が“それでギリギリ”と再度自身の行動の正当化をしたことで、L14では“大変なんだね”と述べることで納得したことを表明する。その直後にKF1が“女子ってたいへんなんですよ”と述べ、再度行動の正当化を行い、最終的にはL16でAR1もそれを受け入れている。

この例でKF1によって示される Subjectivity は、「女子」というカテゴリーである。すなわち「性別」のカテゴリー装置を用いて自身が「女性」であり、AR1が「男性」であることを明示的に示している。「女性」は「男性」と比べ、一般的には準備に時間がかかると考えられるため(Category-bound activity: Sacks 1972, 1992)、9時に会社に行くためには6時や6時半に起きているにもかかわらずそれを“寝坊”とすることが正当であると主張している。言い換えると、自身の個人的経験を「女性」というカテゴリーに拡張して当てはめているわけである。そしてこの「女性」が準備にどれほどの時間がかかるかということとは、おそらく同じ「女性」カテゴリーを適用できる者(もしくは「女性」カテゴリーを持つ者を代弁しなければ)でなくてはならない。事実「男性」であるAR1は、L16で“そんなにかかるとは思わなかった”と述べるにとどまっている。

このように Subjectivity を明示的に示す場合、相互行為の参加者たちはなにかの目的をもって示していると考えられる。特にカテゴリーを示すことの代表的な目的は、自己紹介(自己開示)であるだろう。ただし、自己紹介はカテゴリーを示すことによるのみ行われるわけではない。もっと個人的な情報を示すことによって達成される場合もある。さらに言えば、自己紹介は必ずしも自分が行うわけでもなく、他者によって行われることもある。

例2

- 01 E こいつがごえもんの影響で::, あのと:酒造学科に入って:,その大学院で:研究
- 02 して:() ,ん[で元々ビール()今違うとこに((裏で A,B と話を続ける))
- 03 C [あれ D 入ってから]じゃなかったけごえもん()したの
- 04 D 俺浪人中に読んだんだよ,まだ単行本でてねえけど
- 05 C まじか(1. 5)それは気づかなかった(1. 2)[まじ
- 06 E [彼がもうすぐ子ども生まれるて:
- 07 A お:[::

- 08 B [お::
 09 C あ::
 10 B hh[h 楽しみだね::

この会話には5人の参加者がおり、AとBがEと会話をしている時(L01, 02)にCとDが2人で会話を始めている(L03, 04)場面である。この例には Subjectivity が示される場面が三つある。すなわち L01, 02 でEが“こいつ(D)”のことをAとBに紹介している場面、L03 でEの発話を聞いていたCがDについての自身の知識との相違を発見し、Dに確認を求め、L04 でDが自身の Subjectivity を示す場面、そしてL06 でEが“こいつ(C)”のことを紹介している場面である。L01, 02 やL06 でEによって示されたCやDの Subjectivity は他者紹介のために示されていると理解できる。自己/他者の情報を開示することは様々な目的をもって行われているとも考えられるし、またそれ自体が目的となる場合もあると考えられるが、ここでは多くを論じることはできない。しかし、L04 でDによって示される自身の Subjectivity はやはり明確な目的を持って示されているといえるだろう。L03 ではCによってDの identity の確認がされている。すなわち、L01, 02 で示されている“ごえもんの影響で酒造学科に入った”というDの Subjectivity が、Cがそれまで構築してきたDの Identity と異なっていたためにそれをD本人にむけて“(酒造学科に)入ってからじゃなかったけ”というDの Subjectivity が質問の形式をとって産出されたわけである。それに続くL04における“浪人中に読んだ”という個人的な情報の提示によって示されるDの Subjectivity は、これを修正する目的で示されたと理解することができるだろう。

このように直接的に示される Subjectivity はカテゴリーの表示や個人的な情報提示など様々な方法で相互行為を通して示される。これは自分で自分の Subjectivity を示すこともあれば、例2でCがDの Subjectivity を示したように、他の参加者が自分に向けた Subjectivity を直接的に示すこともある。そしてその Subjectivity はなにかしらの目的をもって示されるということが言えるだろう。Subjectivity を示すことによって何を行っているのかというのは、それ自体が非常に興味深く、重要な課題ではあるものの、ここでは深く論じることはせず、別稿に譲りたいと思う。

3.2 間接的に示される Subjectivity

相互行為を通して直接的に示される Subjectivity によって何か行う一方で、特定の行為を行うと、その行為の中に暗示される間接的な Subjectivity も存在する。次はこの間接的な Subjectivity についてみていきたい。例3、および次の例4では実に様々なことが行われていることが観察できるが、ここでは特に間接的な Subjectivity を論じる上で必要な部分に焦点をあててみて行きたいと思う。

例3

- 32 E 僕の友達は:,奥さんに:めちゃくちゃなのしられたらしいですよ,
 33 [なんか,
 34 D [それを黙って聞くのが優しさなのかな
 35 E なん[か,言い方が変わるらしくてh() つらいから

- 36 C [それか,それか
 37 B あ,そうそう h
 38 C そうなのか
 39 B 本音が出ちゃう h
 40 E そう,そうそうそう
 41 C ほう
 42 D ほ:う
 43 E なんか旦那さんが:,すごいなんか,きょどってたら:,()ねえ
 44 (少しはこうしたら)みたいな感じですね:怒られたらし[くて
 45 C [うえ:い(0. 8)熱い展開
 46 が待ってた
 47 B 母は強いよ:hh
 48 E でも産んだ後忘れてるらしいっすから
 49 B hh そうそうそうそうそう
 50 C そうなんだ h
 51 B hh ま h る h ご h と ()
 52 C ままるっと忘れるもんなんだ,そっか
 53 (2)
 54 C よし,気にしないようにしよう

この例では参加者たちは出産について話をしている。L32ではEが“僕の友達は奥さんにのしられた”とEの友人の話始める。さらにL35で“なんか言い方が変わるらしくて、つらいから”とこの友人の話を続けて語っている。するとL37でBが“あ、そうそう”とEの話に共感を示し、さらにL39では“本音が出ちゃう”とL35の“言い方が変わる”という発話を言い換えている。また、L48でEが“でも産んだ後忘れてるらしい”と述べると、L49では“そうそうそうそうそう”とやはり共感を示し、L51で“まるごと(忘れる)”と情報の追加を行っている。

ここでの一連の流れはL43, 44のEの発話の直後のL47でB自身が“母は強い”と述べているように、Eが“らしい”という伝聞の形で「出産を経験した母」の話を産出し、Bがそれに共感を示しEの発話を言い換える、あるいは情報を追加する、という形で進んでいる。このようなBの発話は、一般的に考えると同じ体験をしてきた者にしか行えないものであるといえるだろう。これは出産未経験者であると考えられるCやDによるL37の“そうなのか”やL41, 42の“ほう”という意外性を示す発話からも分かる。しかし、この流れの中で「母」というカテゴリーが明示的に示されたのは後半のL47である。つまりここでは、「母」というのを明示的に示すことなく「出産を経験した母」の話に共感を行っていることになるのである。

この点について、どのような流れでこの会話が産出されたのかを確認するためにこの直前の発話から見ていきたい。

例4

- 01 B たちあいするんですか

- 02 C できれば(0. 4)できれば(0. 4)それを希望してます
- 03 B いいですよ:,やっぱり一緒にいると hh
- 04 C お[::
- 05 B [お前全く役に立たなかったけど hhhh
- 06 C あ:おれもそんな感じになりそう
- 07 D そうなのってなんか,ほんと:ずっと言われますもんね hh
- 08 C あ:ずっと残るからなんか,よけいにこわいよね
- 09 D こわいこわい
- 10 E いや,男は役に立たないすよね
- 11 D まあ,実際はね(1. 8)[言われても言われなくてもね
[そいや():もなんか:,あの残ってたお昼とか食べちゃってだ
- 12 B [め,=
- 13 D [hhh
- 14 B =だめでしょ食べないでくださいとか言って怒られ[て hh(0. 3)=
- 15 D [hh 食い意地はりすぎ
- 16 B =もう,(病室)も,ちゃんと食べない方がいいですよ,奥さん:もしかしたら
- 17 食べるかもしれないんで[残しといた方がいいですよ
- 18 A [は:い
- 19 C あ:なるほどなるほど
- 20 B hh 病室の,お昼ご飯とか[hhhh
- 21 C [はいはいはいはい
- 22 E なんか,男ができることは:,手を握ることだけっていいます()
- 23 B hhh[h
- 24 D [そうなんだ
- 25 C は:::(2. 5)たしかにそうかもしれ[ない
[時間かかる人は:もうそれでつらいだろ
- 26 B うから,
- 27 もうでもそばにいただけで:[,いいと思う
- 28 C [あ::
- 29 B わたし結構かるかったから結構早かったから:,う↑:↓生まれちゃう::
- 30 とか言って電話してたんだけど:hhhh
- 31 C あ::なるほどなるほど

この例4は例3の直前の会話である。L1でBがCに向かって“たちあいするんですか”と、出産の話を始め、L2でCが“できれば立ち会いたい”というややあいまいな返答をすると、L3では“いいですよ、やっぱり一緒にいると”とたちあいをすすめる。ところがL5になると“おまえ全く役に立たなかった”とBの夫であるAが役に立たなかったという話をスタートし、L12, 14ではその具体的な話が述べられる。その後L16, 17では出産を控えるCに向けてアドバイ

スを送っている。L22 で E が“男ができることは手を握ることだけ”と述べたことを受けて、L26, 27 では“そばにいただけでもいい”と再びアドバイスを送っている。ここでは全体を通して、B がこれから出産に立ち会う可能性がある C に向けてアドバイスを送るという文脈が形成されているのである。

さて、この例においても B が「出産を経験した母」であることは明示的には語られていない (L29, 30 では非常に直接的に近い表現が用いられているが、それでも明示的に示してはいないだろう)。ところが L03 で産出された“いいですよ、やっぱり一緒にいると”というのは自身が経験したことを語っているように構成されている。ここだけでも直観的に B が出産経験者だということが分かるだろう。さらに L05 から始まり L12, 14 で具体化される B の語りや、最終的に L29, 30 で B 自身が述べているように、“軽かった”, “早かった”, “生まれちゃう”というエピソードは B 自身が出産を経験した者でなければ語るができない。すなわち自身の経験を語るという行為の中に B が出産経験者であることが暗示されているのである。この間接的に示される Subjectivity を示すことによって、B は出産経験者という立場から、これから出産に立ち会う C に有効なアドバイスを送ることに成功しているのである。また、L 29, 30 では B 自身の出産は“早かった”と語っていることから分かるように、L26 で述べられる“時間かかる人”は“つらいだろう”という予測の形を取って産出されている。すなわちさきほどの例 3 における E の“僕の友達に奥さんにののしられた”という語りは B が予測でしか語れない辛い出産の経験を補う形で産出されたと理解できるだろう。

ここでもう一度例 3 を見てみたい。例 4 では出産経験者として C にアドバイスを送っていたが、例 3 では B 自身が述べるように「母」として E の友人の奥さんに共感を示している。言い換えると、ここでは微妙な Subjectivity の変化が見られる。この点について考えてみたい。

すでに述べたように、L29, 30 では B 自身の出産の経験は“軽かった”“早かった”ものであり、L32 から語られる E の友人の妻の“つらい”出産の経験とは異なるものである。そこで、「母」というカテゴリーを Subjectivity として提示することによって自身の立ち位置を「出産経験のある母」へと変化させ、出産の経験に共感を示すことができたのだと考えられる。他方、例 3 ではアドバイスを送るといった文脈が形成されていたことをすでに述べたが、ここでもアドバイスを送るといった文脈で語られているとすれば、B によるこの共感、伝聞として語られる E の語りを補助する役割をも担っているように感じる。すなわち、出産に関わるアドバイスを送る担い手としては、伝聞として語る E よりも「出産経験のある母」である B の方がより効果的にアドバイスを送ることができる、ということである。事実、最終的に C は L52, 54 においてアドバイスを受け取ったことを示しているのが分かるだろう。

ここまで見てきたことから、間接的に示される Subjectivity について以下のことが言えるだろう。すなわち、Subjectivity を間接的に示すためには、その行為に結びついた Identity を持っていなければいけないということである。これは逆に言えば、特定の行為を行うとその Identity を持っているとして理解される可能性がある、ということでもある。

本節では「母」や「出産経験者」という B 自身の Subjectivity が分析されたが、例 2 で C が D の Subjectivity を示したように、他の参加者が自分に向けた Subjectivity を間接的に示すこともあるだろう。例えば Nishizaka(2012)では、参加者が相互行為を通して、互いに「友人—友人」というカテゴリー対を交渉しながら行為していることを分析している。このカテゴリー対は、

相手に対して“あなたは私の友達です”と直接的に示すのではなく¹，お互いの行為の中に相手が友人であることが間接的に示されているためであると理解ができるのである。

また，本稿では間接的に示される Subjectivity の例として経験を語ることや共感を示すことなどが分析されたが，他にも多くの要素が挙げられるだろう．例えば語彙の選択，人称表現，イントネーション，ピッチ，コード・スイッチングなどが考えられる。

4. Subjectivity と Identity の関係性

ここまで Subjectivity と Identity を区別し，相互行為を通して直接/間接的に Subjectivity を示すことによってなにが行われているかを分析してきた．一方で相互行為を通して示される Subjectivity だけでは説明ができない現象も存在する．以下では Subjectivity と Identity を分けて分析する意味について例を見ながら論じてみたい。

例 5

- 01 C あ(0. 8)お久しぶりです s :
- 02 F お↑:::
- 03 C ご無沙汰しております
- 04 F 生きてたか:
- 05 C まだ生きてました(0. 4)だいじょぶです
- 06 F ちゃんと結婚はした↑
- 07 (1. 5)((なんらかの非言語行動))
- 08 F お:[,お:,何飲んでく
- 09 C [hhhhh
- 10 C いいんすか
((中略))
- 28 C あ:h. あとは::(1. 8)もうすぐ(0. 8)[,父親になります
- 29 F [子どもが生まれ(),お:::

この例は C が例 2~4 でみてきたグループから抜け出して，F と二人で会話をしている場面の冒頭部である．L01 で“お久しぶりです”と挨拶をして会話を展開していき，L06 では F から“ちゃんと結婚した”という質問がされる．C はその質問に対して言語的な返答を行っていないが，L08 で F が“お:,お:”と反応を示していることから L07 では非言語による肯定の返答がされたと推察することができる．さらに会話が展開していくと L28 では C から“もうすぐ父親になります”ということが報告され，“父親になります”と重なる形で L29 では F から“子どもが生まれる”ということが，発話されている²。

L01 や L29 では F によって，C の Subjectivity が直接的に質問の形式で産出されていることが分かる．すでに述べたように，これは C と F が久しぶりに会った時の会話の冒頭部であり，F の二つの質問の前に C によって直接的/間接的に示された Subjectivity は見られない．それにも関わらず F は C の Subjectivity を示すことが可能になっているのである．なぜそれが可能になっているかを理解するためには Subjectivity と Identity の関係性を見て行く必要があるだろう。

本稿の冒頭でも述べたとおり、Subjectivity とはその場その場の会話で言語を通してどう自らを表現しているか (identity brought about)であり、Identity は Subjectivity よりもう少し固定的なもので、自分が繰り返し構築してきた自己(identity brought along)である(Bynham 2011). そして他の相互行為の参加者は自分が相互行為を通して示してきた自己の Subjectivity を蓄積させることによって他者の Identity を構築することになる. 例 5 の参加者に即して言うならば, F は, C が相互行為を通して示してきた Subjectivity を蓄積させることによって C の Identity を構築しているのである. この Identity をリソースにして, 相互行為に相手の Subjectivity を示していくのである. さらに言えば C が自身の Identity をリソースにして, 相互行為を通して示していく Subjectivity は様々な要因(例えば相手との関係性や, 自分をどう見せたいかなど)によって決定されることが考えられる. そのため, C 自身の Identity と F が構築した C の Identity は異なってくるだろう. これを図式化すると, 図 1 のようになる.

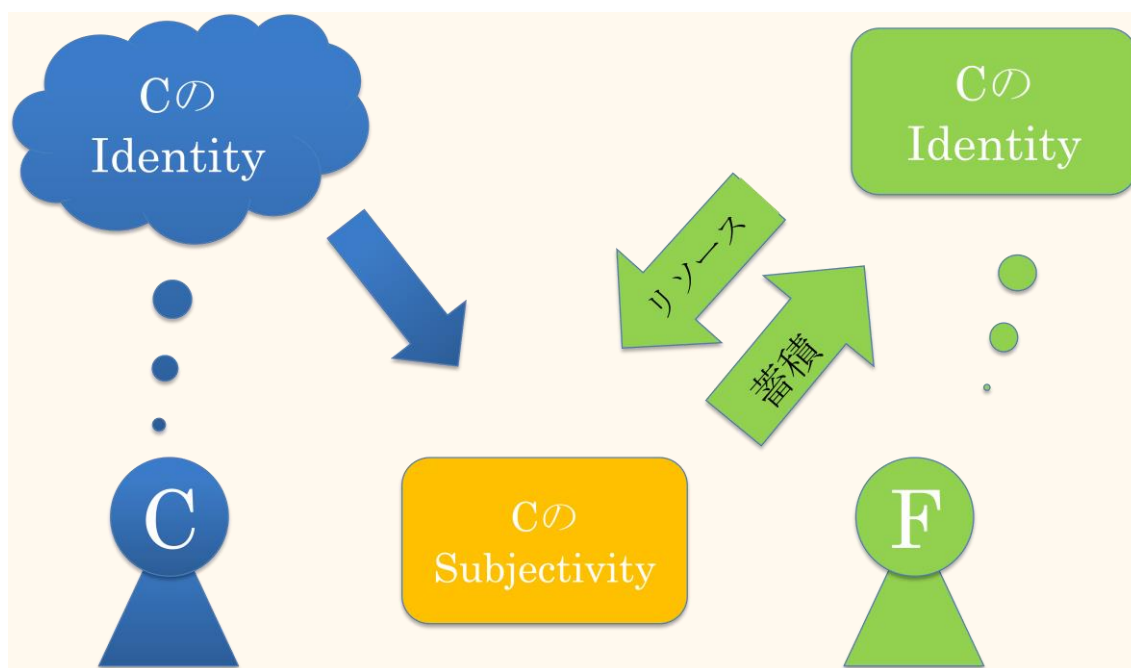


図 1: 他者の Subjectivity と Identity

例 5 において C によって直接的/間接的に示された Subjectivity は見られないにも関わらず, F が C の Subjectivity を示すことが可能になっているのはまさにこのためであると考えられる. そしてこのために Subjectivity と Identity を区別して分析する必要があるのである.

5. 考察: Subjectivity のギャップはなぜ生まれるのか

本節では, 本稿でこれまでに分析されてきた間接的な Subjectivity と, Subjectivity と Identity の関係性について考察を加えていきたい. 筆者はこれまで様々なインタビューの中で, 「外国人」と見られたくないのに周りの日本人から「外国人」という扱いを受けるといった報告を聞いてきた. このことから特に, 自分が示す自分の Subjectivity と, 相手から示される自分の Subjectivity がなぜ異なることがあるのかという点に関して論じてみたい. すでに, 間接的

Subjectivity の特徴として、特定の行為を行うとその Identity を持っているとして理解される可能性があるということは述べた。一方で、このことは自身が示した Subjectivity が他の相互行為の参加者たちによって異なった形で蓄積されるという危険性もはらんでいる。

ここで、キム(2008)で分析されている時間稼ぎのストラテジーの例を見てみたい。

例 6(キム 2008 : pp. 20 より引用)

- 1 J1 留学生活での大変な経験↑
- 2 K1 大変な経験>
- 3 J1 <でもさ,留学してるって感じないんじゃない↑
- 4 K1 # そうだね,まー生活 # # #,だ,もう,日本語 # ベイス(J1 を見ないでテーブルをみる)だし
- 5 J1 うん
- 6 K1 だし,# うん,なんでだろうな,# # テレビも普通に見てるし,# # なんだろう,その,あんまり違和感とか感じてないから

この例では K1 による多くのポーズが見られるが、ここで K1 は日本語の表現を探していたのではなく、L3 で J1 に指摘された留学している感じがしないということの理由を探していたということがフォローアップ・インタビュー(以下 FUI)で明らかになっている。キムによると日本語超上級者である K1 はフィルターとしての「なんか」に否定的な評価を持っており、ここで事前調整として「なんか」の不使用が起こり、ポーズが表層化しているという。一方で K1 は FUI で「フィルターを入れることが好きではない。それは同じ外国人の会話を聞いてすごく気になったから、例えば韓国人がよく使う「なんか」などは本当に使わないといけない場面だけに限定して使おうとしている”(pp. 20)と述べていたことが報告されている。すなわち、この場面でのフィルターの使用回避は K1 による外来性(Neustupný 1985)の回避であると言えるだろう。ここで K1 が間接的に示そうとしている Subjectivity は定かではないが、少なくとも「外国人」あるいは「韓国人」という Subjectivity を回避しようとしていたことが分かる。

ではもう一人の相互行為の参加者である J1 は K1 によって示された Subjectivity をどのように蓄積させるだろうか。ここで確定的なことを述べることはできないが、一つの可能性として、K1 によるポーズを外来性と捉えてしまうということが考えられるだろう。そうだとするならば、K1 が「外国人」とであると判断され³、K1 が示した Subjectivity を全く別の形で蓄積することになる。すると、J1 が構築した K1 の Identity をリソースにして K1 の Subjectivity を示したときに、「外国人」という Subjectivity が示されることになり、K1 が示す K1 の Subjectivity とギャップが生まれてしまうのである。

ただし、間接的に示される Subjectivity が他の参加者にどのように理解され蓄積されるかについては様々な要因があると考えられる。この例に即して言うならば、K1 によるポーズを「外来性」だと捉えたとしても、そこから「外国人」という Identity が構築されるのは同化志向が強い日本社会においてであろう。例えば、オーストラリアやアメリカで同様な状況で「外国人」という Identity が蓄積される可能性は、おそらく低いだろう。

以上述べてきたように、間接的に示されるアイデンティティは、特定の行為を行うとその Identity を持っているとして理解される可能性があるがゆえに、自身が示した Subjectivity が他の相

互行為の参加者たちによって異なった形で蓄積される場合もある。そしてそれがなされると、お互いが示す Subjectivity にギャップが生まれ、「外国人」と見られたくないのに周りから「外国人」という扱いを受ける、あるいは受け続けるという状況が生み出されてしまうのである。

6. まとめ

本稿ではアイデンティティ概念を Subjectivity と Identity に区別し、会話分析的手法により分析することによって、言語的相互行為におけるアイデンティティについて論じてきた。それにより直接/間接的な Subjectivity, Subjectivity と Identity を区別することの重要性、特定の行為を行うとその Identity を持っているとして理解される可能性があるという間接的な Subjectivity の特徴と、それがゆえに起こる Subjectivity のギャップなど、相互行為を通して示されるアイデンティティについていくつか重要な指摘をすることができた。

一方で、相互行為を通して示される Subjectivity は何をするために示されているのかや、自己の Identity をリソースに Subjectivity を示す際には、どのような要因で Subjectivity が選択されているのかなど様々な課題が浮き彫りとなったが、これらは今後の課題としたい。

参考文献

- Baynham, M. (2011). Identity brought about or brought along?. International Doctoral Summer School on 'Identity and Interculturality: Research Methods', 4-8 July 2011 at Roskilde University. (<https://www.youtube.com/watch?v=DffiHFD5z9A>) (2016年2月14日確認)
- Block, D. (2013). Issues in language and identity research in applied linguistics. *Estudios de Lingüística Inglesa Aplicada*. 13. pp.11-46.
- Bushnell, C. (2015). Gaikokujin ja Arimasen (I'm Not a Foreigner): An Analysis of the Interactive Construction and Contestation of Being a Foreigner in Japan. 国際日本研究 第7号 pp. 137-151 筑波大学大学院人文社会科学研究科
- Hall, S. (1996). Introduction: Who needs 'identity'?. In S. Hall & P. du Gay (Eds.), *Questions of cultural identity*. pp. 1-17. London: Sage
- キム,キョンソン (2008). 韓国人超上級日本語話者の言語管理—事前調整を中心として— 村岡英裕[編] 言語生成と言語管理の学際的研究—接触場面の言語管理研究 Vol.6 人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 198 pp.13-27 千葉大学大学院人文社会科学研究所
- Luk, J.C.M. (2008). CLASSROOM DISCOURSE AND THE CONSTRUCTION OF LEARNER AND TEACHER IDENTITIES. In M. Martin-Jones, A. M. de Mejia and N. H. Hornberger (Eds.), *Encyclopedia of Language and Education 2nd Edition. Volume 3: Discourse and Education*. pp.121 - 134. Springer.
- 池田佳子 (2007a). L2 言語相互行為とアイデンティティ構築-ハワイにおける日系人学習者とのインタビュー談話の分析から- *Journal CAJLE Vol.9* pp.1-20 カナダ日本語教育振興会
- 池田佳子 (2007b). 言語相互行為とアイデンティティ構築-第二言語教育への応用を考える- *言語と文化 Vol.8* pp.201-218 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- Kasper, G. (2004). Participant orientations in German conversation for learning. *The Modern Language*

Journal. 88. pp. 551-567.

Neustupý, J. V. (1985). Problems in Australian- Japanese contact situations. In J. B. Pride (Ed.) *Cross-cultural Encounters: Communication and Mis-communication*. pp. 44-64. Melbourne: River-Seine.

西阪仰 (1997). 相互行為分析という視点 金子書房

Nishizaka, A. (2012). Doing "being friends" in Japanese telephone conversations. In Hisashi Nasu and Frances C. Waksler (Eds.), *Interaction and Everyday Life: Phenomenological and Ethnomethodological Essays in Honor of George Psathas*. pp. 297-315. Lanham, MD: Lexington Books.

Sacks, H. (1972). An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In D. Sudnow (ed.), *Studies in social interaction*. pp.31-74. New York: Free Press.

Sacks, H. (1995). *Lectures on conversation (Vols I and II)*. (Ed. G. Jefferson, intro. E. A. Schegloff). London: Blackwell.

徳井厚子 (2015). 複言語サポーターの語りにみるカテゴリーの構築 リテラシーズ 16 pp.25-32
くろしお出版

Weedon, C. (2004). *Identity and culture: Narratives of difference and belonging*. Buckingham, UK: Open University Press.

¹ もちろん何かの目的をもってこれが発話される場合も存在すると考えられる。

² 音声不明瞭であったため確認することはできないが、Cの発話とほぼ同時にされており、不確かなことを述べているのでおそらく質問の形式で発話されているだろう。

³ あるいは、(例えば言語外の外来性見た目や社会文化的行動などによって)すでに「外国人」だと判断されていた場合は、その Subjectivity が証拠として蓄積され「外国人」であるという Identity をより強固にするかもしれない。